

助詞コソの文末における一用法

鴻野 知暁

要旨

本稿は連体形や体言に後接し、そこで文が終止するというコソの文末用法について考察する。この用法は10C末頃から認められる。本稿では、平安初期から中期の作品を調査し、異文を併せて考えることによって、当該用法の発生を探った。上代で文の中間に現れていたコソは、中古には文末の述語内部にも生起するようになる。それに伴い、～ニコソアレという形式が頻繁に使われるようになる。当該用法は、これを下地として、～ニコソアレから①アレの省略、②ニの脱落という二つの変化によって生じたものであると結論される。係助詞の述語位置への進出は中世でさらに進行し、ヤランやゴサンナレ、ゴサンメレといった形式がこの背景の元で成立したと見られる。

キーワード：係助詞，終助詞，コソ，係り結び，異文

1. はじめに

次に引くのは『源氏物語』、御法巻の一節である。

- (1) (源氏)「かく何事も、まだ変はらぬけしきながら、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におし当て給へるほど、大将の君(=夕霧)も涙にくれて、目も見え給はぬを、しひてしぼりあけて見たてまつるに、なかなか飽かずかなしきことたぐひなきに、まことに心まどひもしぬべし。(引用は岩波書店『新日本古典文学大系』(以下、『新大系』と略)による、4-174頁)

紫の上の死後、彼女の顔に見入る源氏。その顔は生きている時と変わらぬも、臨終を迎えたということははっきりとしている、という文脈である。本稿で取り上げたいのは、この中の下線部、「限りのさまはしるかりけるこそ」という箇所、コソに関する語法である。

冒頭の例(1)を形式的にみると「～ハ～連体形+コソ」という形である。周知のとおり、係助詞のコソは、「～コソ～已然形」という係り結び句を形成する。大抵の場合は、「～ハ～連体形+コソ」という形は、連体形部分が主語の資格を有する準体句であって、結びの已然形述語が省略されている、と解されるであろう。つまり、「～ハ～連体形+コ

ソ（～已然形）」と考え、連体形部分と已然形部分とが主述関係にあるとするのである。しかし、(1) はそのように受け取ることはできない。

主な注釈書でこの部分がどう訳されているか見てみると、「もう最期であることははっきりしているのです」（小学館『新編日本古典文学全集』（『新全集』と略）、「亡くなっているという兆候ははっきりしてきたことよ。」（『新大系』）、「最後の相ははっきりしててね」（角川文庫）となっている。これらの訳からもわかるように、結び句にあたる述語はそれと指摘できない。そして、注釈書では、連体形部分「しるかりける」は主語ではなく、述語のようにとられている。つまり、「限りのさまはしるかりけるこそ」は内容的には「限りのさまはしるかりけり」とほぼ同じなのである。すると、コソは終助詞同然に文末に添えられているだけ、と見ることもできる。このようなコソの用法は、「～コソ～已然形」という、いわゆる係り結びをつくるコソとはだいぶ様子が異なっているように見える。本稿ではこの特殊なコソの用法を整理し、いかにしてそのような語法が生じたのか、また、この語法をもたらした平安期の文法的背景を中心に探っていきたい。

なお、管見の限りでは、この語法に関するまとまった論考は存在しないようである。ただし注釈書類で、係り結びに使われるコソとの異質性が指摘されることがある。たとえば、『枕草子』の

(2) 左右の衛門の尉を、判官といふ名をつけて、いみじうおそろしう、かしこき者に思ひたるこそ。（引用は『新大系』による。330頁）

の文末の「こそ」に対し、『新大系』（渡辺実校注）の注では「「こそ」で終止であろう。強調表現の一種で、恐ろしく、偉いものだと思っていることだ、の意。」と述べられている。「「こそ」で終止であろう」とあるのは、係り結びに使われ文中に現れるコソとの差異を意識しての記述だと思われる。

2. 用例の整理

2. 1 中古資料中の用例の提示

前節で指摘したようなコソの文末用法は上代には無く、中古以降の資料中に見られるものである。本稿では平安初期から中期の作品における当該用法を探ることとする。

(1) (2) であげたのは「連体形+コソ」で文が終わり、述語のように働くものであった。本節では、体言もしくは用言連体形をコソが受け、そこで文が終止する例（コソの後に述語が補われないもの）を、作品ごとに列挙する²⁾。なお以下では、便宜上「連体形+コソ」と「体言+コソ」をまとめて「N+コソ」と表記する（2.1節と2.2節では「体言+コソ」の例を△で示す）。また、(1) (2) のような文末用法かどうか不審なもの（コソの後に述語を補えるかもしれないもの）は、?で注意した³⁾。

用例の収集にあたっては、『新全集』または『新大系』を使用した⁴⁾。作品名の後に、『新全集』・『新大系』のいずれから引用したのか、そしてその底本は何かを記した。用例

の後には本文中のページ数を示してある。調査は『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』(以上は『新全集』を使用)、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』(これらは『新大系』を使用)についても行ったが、これらの作品中にはコソの文末用法は発見されなかった。

ここでは、本稿筆者の収集した全用例を示し、用例の分布の大体の傾向を見ることが主な目的である。次節以降、いくつかの例については、議論に必要とされるだけの文脈を含めて改めて示すこととする。

・『うつほ物語』(『新全集』、前田家本) …29 例

暁さへなきこそ 2-213／思し隔てたるこそ 2-352／常磐木のやうに見えたまふこそ 2-401
／宮のけ劣らせたまふこそ 2-402／出ださずなりにけるこそ⁵⁾2-412／思ひたまふこそ
2-468／?渡らせたまはぬこそ 2-483／△おろかなるわざこそ⁶⁾2-485／待ち取るなるこそ
2-508／かき抱きたまふらむこそ 2-534／△異筋こそ 2-573／△?二の宮こそは 2-573／
△?さても世人こそ 2-593／かうことなきやうに見えたまふこそ 3-22／承らずなりにし
こそ 3-90／?同じ心ならましかばと思ふこそ 3-101／かくのみものしたまふこそ 3-118／
聞こえ触るべくもあらぬこそ 3-139／知らじと思すらむこそ 3-142／今かう思ひたまふ
こそ 3-154／いひだにいはずなりにけるこそ 3-164／△院の御方こそは 3-173／△おほい
大臣のみこそは 3-252／違へたまふなめるこそ 3-265／かかる恥を見るこそ 3-290／急ぎ
したまへるこそは 3-400／?引き具したまうてしこそ 3-428／いみじき大事のことを思す
なるこそ 3-472／?今に見せたまはぬこそ 3-477

・『枕草子』(『新大系』、三卷本一類・陽明文庫本) …8 例

?ふとみさせ給へりしこそ 166／いみじうをかしきこそ 205／こと葉の、にくきこそ 275
／聞きわき給ひしこそ 284／かかるいましめもののあるこそ 295／△馬副のほどこそ 304
／かしこきものに思ひたるこそ 330／いましめおきたるこそ 347

・『源氏物語』(『新大系』、大島本、ただし浮舟巻は明融本) …15 例

思ひ定めずなりぬるこそ 1-56／御方たがへこそ 1-69／△伊予の介におとりける身こそ
1-93／△母方は三月こそは 1-247／いとほしきことありぬべき世なるこそ 2-294／限りの
さまはしるかりけるこそ 4-174／知らぬやうに侍るこそ 4-317／もてなさせ給ふこそ
4-442／常にとりない給ふこそ 5-154／いと艶なるこそ 5-169／さぶらひ侍らむこそは
5-199／かうのたまふこそ 5-210／かたほなるはなかりけるこそ 5-317／さすがにおぼし
咎むるこそ 5-345／心づよくおはしますこそ 5-404

・『和泉式部日記』(『新全集』、三条西家本) …2 例

?おしはからせたまふめるこそ 27 / ?殺させたまふべかなるこそ 60

・『紫式部日記』(『新全集』、黒川本) …1 例
むつまじうなりにたるこそ 206

・『更級日記』(『新全集』、御物本) …1 例
?やまと撫子しも咲きけむこそ 287

上に列挙された、コソの文末用法の出現の実態として、次の三点が指摘される。

まず、平安中頃からこの用法が見られること。本稿の調査では、10C半ばまでの資料中には当該用法は発見されなかった。文献上は、『うつほ物語』が成立した10C末頃から認めうるものである。

次に、『うつほ物語』での用法の分布について。『うつほ物語』は物語の構造が執筆時期を絡めて問題とされる。構造上、二部あるいは三部などと分けられることがあるが、「俊蔭」以下「沖つ白波」までの部が、それ以降の巻と大きく区別されることは認められるだろう⁷⁾。「沖つ白波」までを前編、それ以降を後編とすると、コソの文末用法は、前編にはわずか1例現れるのみで、残りの28例は後編に集中するのである。前編と後編の文章量はほぼ同じくらいであるのにこれだけの偏りが出るのは注目すべきところである。おそらくは前編と後編の制作時期に隔たりがあり、当初は新奇だったこの用法も、その間、徐々に定着していったのだと思われる。これがそのまま後編における出現頻度の増加につながったのだと見ておきたい。

第三に、和歌には現れないこと。三代集に現れないのは勿論のこと、他作品においても和歌部分にはこの用法は見られない。当用法は、『枕草子』で地の文に見られる以外には用例が会話文・心中思惟に限られるのであるが、これは口語的性質の強さを意味するであろう。このような性質を持つ当該用法は、伝統的な和歌の文体になじまなかったのだと考えられる。

2. 2 異文の整理

前節で、文末用法のコソの例を列挙したが、これらの中には異文が存在するものがある。本節で行いたいのは、この異文の整理と検討である。具体的には、異文をパターンごとに分類・整理し、各パターンの様相から当該用法の性質を探ろうというのである。相当数の異文が有意味なパターンに従って出現するならば、そこには、単なる誤写にとどまらない書写意識、ひいては当代の文法観が反映している可能性が高い⁸⁾。今、我々は(1)(2)のようなコソの文末用法について知りたいわけであるが、まず異文について検討してみることは一つの手がかりになると考えられるのである。

以下、異文が存在するものについて、『新全集』または『新大系』で採用されている底本での本文(2.1節で示されたもの)をあげ、他本との相違部分を下線部で指摘し、「―」に続けて異文を示した⁹⁾。〈 〉内にどの本によるのかを記す。なお、校異はコソに関わる部分に限る。

α. 「N+ニコソ」

(3) 「いとほしきことありぬべき世なるこそ」(『源氏物語』2-294¹⁰⁾) ―にこそ<青(肖三)>

(4) 「(仲澄は)心のいと操に、かしこかりしかば、身をいたづらになして、ことも出ださずなりにけるこそ。…」(『うつほ物語』2-412) ―にこそ<板>

『うつほ物語』で、逆に、前田家本(『新全集』の底本)では「N+ニコソ」だが他の本では「N+コソ」となっている例がある。

(5) 「常に聞こえむと思ひたまへつれど、ことのついでもなく、常に人騒がしかりつれば、聞えざりつるにこそ¹¹⁾。…」(『うつほ物語』2-411) ―こそ<板>

(6) ここに、この尚侍の、世の中にまたなき者にもものしたまふなれば、一人になりたるにこそ。(『うつほ物語』2-596) ―こそ<板長宮櫛二紀>

これら異文の「にこそ」の後ろには「あれ」や「あらめ」といった語句が省略されていると考えられる。ここでの「N+コソ」は、「N+ニコソ(アレ)」と同様の理解をされるだろう。『新全集』は、(3)を「いまにきつとお気の毒なことになりそうなお二人の仲です」、(4)を「…おくびにも出さずに死んでしまったのです」と訳している。また、『旧大系』は(5)を「いつも人がいてうるさかったので申上げなかったのです」と訳す(以上、三つの訳での下線部は引用者による)。これらでは「N+コソ」は述語的に理解されているのである。

β. 「N+コソアレ」

(7) △「御方たがへこそ。夜深く急がせ給ふべきかは」(『源氏物語』1-69) ―こそあれ。あながちに<別(陽)>

この異文に見られる「体言+コソアレ」形については4.3節で検討するが、結論を先取りするならば、これは「体言+ニコソアレ」でニが無くなったものと考えられる。「体言+ニコソアレ」(コソを除けば「体言+ナリ」)はコピュラ文の述語として働き、「～である」と訳されるが、(7)も「(これは)御方違えですよ」とコピュラ文的に解するのがよいだろう。

α・βは、ともに「N+コソ」と「N+ニコソアレ」とのつながりを感じさせるタイプであることを注意しておく。

γ. 助詞による終止

- (8) 「いとほしきことありぬべき世なるこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもささめきけり。(『源氏物語』2-294) 一なるを<別(麦阿)>
- (9) おなじ枝さしなどのいと艶なるこそ。(『源氏物語』5-169) 一いかなるぞ<別(陽図)>
- (10) △「馬副のほどこそ」(『枕草子』304) 一むまへのほどぞ<能因本>

(8)の異文は、ナリの連体形に間投助詞ヲが後接した形で、(3)にあげたように「…世なるにこそ」の異文もある。(9)・(10)の異文はそれぞれ「連体形+ヅ」、「体言+ヅ」で、これらのヅは終助詞とされたり、係助詞の終助詞的用法と呼ばれたりするものである。

(8)と(9)のヲやヅは言い切りの述語に付属しているのであって、「ありぬべき世なるを」を「ありぬべき世なり」、「いと艶なるぞ」を「いと艶なり」としても文意は大して変わらない。この異文の解釈を「連体形+コソ」についても当てはめれば、コソは文意にほとんど影響せず、語勢を強める程度の働きしかしていないと見ることができる。

(10)の異文のヅは体言に付いて述語を構成し、「体言+ナリ」と同じくコピュラ文の述語として機能する。現代語では「～である」に相当する。これを元に考えるならば「馬副のほどこそ」も述語的と見られるのであって、「馬副といたたくらいである」という内容だと考えられる¹²⁾。

δ. その他、文終止の表現

- (11) この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、ただ、かくこそ。取りどりに比べ苦しかるべき。(『源氏物語』1-56) 一なりぬ。これぞ<河・別>
- (12) 「…いとうとうとしくのみもてなさせ給ふこそ」(『源氏物語』4-442) 一こそもてなさせ給へ<別(平)>
- (13) 「…若き人々は、もののほど知らぬやうに侍るこそ」(『源氏物語』5-143) 一こそ<河(大)・別(横保)>
- (14) 「人の物言ひを、さすがにおぼし答むるこそ」など、古体の人どもは物めでをしあへり。(『源氏物語』5-345) 一事<河(七)>
- (15) 今まで世に侍りて、かかる恥を見るこそと、伏し沈みて、(『うつほ物語』3-290) 一こと<長岡萩九羽イ(家兼)>
- (16) 「世に知らず心づよくおはしますこそ」と、みな言ひあはせて、母屋の際に木丁立てて入れたり。(『源氏物語』5-404) 一など<河(七)>、ことと<別(保)>、などいひて<別(麦阿)>
- (17) 「…大人になりたまへる人を、知らじと思すらむこそ」(『うつほ物語』3-142) 一

思すらむ」とぞく流〔兼棧紀萩前〕>

- (18) …それに道にあひたりける女車の、ふかき所に落しいれて、えひきあげで、牛飼の腹だちければ、従者して打たせさへしければ、ましていましめおきたるこそ。〔『枕草子』347〕 一心のままにいましめおきたると見えたり。<能因本>

それぞれの異文にコメントを付す。

(11) は、大島本での「思ひ定めずなりぬるこそ」が「思ひ定めずなりぬ」と、終止形終止に変わっている。そのことによって「こそ」が「これぞ」となり、次の文に主語として繰り返されることとなる。

(12) で「連体形+コソ」の箇所にあたる異文は「コソ～已然形」という係り結びになっており、「N+コソ」が係り結び相当の強調表現であることがうかがえる。(13) の異文では「知らぬやうにこそ」の後に「侍れ」を補うことができ、(12) 同様に係り結び文となっている。

(14) の「おはします事」は、現代語だと「…ことよ」に当たる詠嘆表現と見てよい。述語「おはします」に「事」が添えられただけである。(15) もこれと同様。

(16) は<河(七)>と<別(麦阿)>で『…おはします』など…』という用言の終止形終止、只の文述語になっている。<別(保)>の『…おはしますこと』と…』は(14) 同様の詠嘆表現。

(17) は、『…思すらむ』とぞ』という引用表現に変わることによって、「思すらむこそ」が「思すらむ」という用言の終止形終止になっている。

(18) について。能因本では「…と見えたり」という語句によって、「注意しておいたようである」と様相性が語彙的に明示されている。一方、三巻本の「いましめおきたるこそ」には様相的意味を表す語句が、表面的には存在しない。ここで α の「N+ニコソ」の異文を思い起こそう。 α のように「いましめおきたるこそ」が「いましめおきたるにこそ」と解されていたと考へてみる。「いましめおきたる」ということは、書き手が直接確認した事柄ではなく推量したことであるから、「にこそ」の後ろには、様相性を込めた「あらめ」を補うのがよい。こうして、「いましめおきたるこそ」を「いましめおきたるにこそあらめ」のように捉えることで、「いましめおきたると見えたり」という異文とのつながりが見えてくるのである。話の流れとしても「いましめおきたるこそ」を「いましめおきたり+推量的表現」のように解するのが自然なところである¹³⁾。これが文の述語となっているのは言うまでもない。

以上、 α 、 β 、 γ 、 δ の各パターンの異文に共通することは、本稿で問題とする文末用法の「N+コソ」が述語的表現になっていることであつた。これは当代で「N+コソ」が述語として理解されていたことの証左となろう。

3. 「N+コソ」の機能と表現性

2.2節で、 α 、 β 、 γ 、 δ の各パターンを見たが、ここでそれらを通じて把握される「N+コソ」の文法的機能および表現性について考えてみたい。

(7) や (10) の「体言+コソ」の場合には、「体言+ナリ」や「体言+ゾ」のようにコピュラ文の述語相当として働く、と見てよいだろう。コソの強い指定性が、対象の指示に発揮されたのだと思われる。

「連体+コソ」についてはどうだろうか。前節の α を振り返ると、「連体+コソ」が「連体+ニコソ (アレ)」に近い解釈を受けていた。「連体+ニコソアレ」でコソを抜いた形は「連体+ナリ」であるが、それは説明の機能を持つとされる¹⁴⁾。現代語ではおよそ「～ノダ」に相当するものである。(4)の例は、仲澄が死に至ったいきさつを推測し、他人に説明しているという文脈であり、いかにも「～ノダ」と訳したくなる場所である。

しかし、

- (19) 「…大人になりたまへる人を、知らじと思すらむこそ」(＝「成人された娘のことは、関知しないとおっしゃるのか」：『新全集』訳) (『うつほ物語』3-142)
- (20) 「え言はぬことを、かうのたまふこそ」と、うち怨じたるさまも若びたり。(＝「とてもお話しできないことを、そんなご無理をおっしゃって」と、すねている様子もあどけない。：『新全集』訳) (『源氏物語』5-210)

などは説明に使われているとは捉えにくい。これらは相手を非難し、なじっているような文脈であるが、コソの持つ語勢の強さが前面に出てきていると思われる。

(8) (14) (15)、また冒頭の(1)の例などの文脈は、説明や非難とも言えず、コソは「発話者の詠嘆を表す」といったくらいの使われ方である。こうなると、「文末でのコソは実質的な機能を持たず、終助詞同然に文末に付け足されているだけ」との感も強くなるのである。

コソ自体が「説明」や「非難」の意味を持つというわけではないだろう。係り結びにおけるコソの語調の強さは先行研究でも度々指摘されることである¹⁵⁾が、文末用法のコソも、強い調子を加えると考えられる。それが、相手にきっぱりと説明したり相手を強く非難したりする物言いに適当だった、というだけであろう。「連体+コソ」におけるコソは「文末において強い調子で言い定める働きを持つ」というように見ておくのが穏当である。

なお、コソの文末用法の用例数を見ると、「連体+コソ」に比して「体言+コソ」の数は少ない(2.1節参照)。「体言+ナリ」や「体言+ニコソアレ」といったコピュラ形式は、述語であることがナリによって保証されているが、「体言+コソ」は述語であることが見かけ上分からない。だから「体言+コソ」は述語形式としてあまり好まれなかったのだと考えられる。一方、「連体+コソ」は、用言の述語性によって、文末述語として安定しやすい。「連体+コソ」は「用言述語+終助詞」のように再分析されていたとも考えられ

るのである¹⁶⁾。

4. コソの文末用法の発生

4節では、コソで終止する語法がいかにして生じたのかを考える。まずその概要を述べよう。手がかりとしたいのは、2.2節で見た異文のパターン α 「N+ニコソ」と β 「N+コソアレ」である。これらは「N+ニコソアレ」を元とした表現であり、また、「N+ニコソ」に近い解釈を持つものでもある。「N+ニコソアレ」からアレを無くせば「N+ニコソ」になり、ニを無くせば「N+コソアレ」になる。そして、「N+ニコソアレ」でアレ・ニの両方が無くなったものとして「N+ニコソ」という形が生じたと考えられるのである。

以下各形式について、通時的な面を中心に必要なところを述べ、コソの文末用法の発生の話につなげたい。

4. 1 「N+ナリ」と「N+ニコソアレ」の使用状況

「N+ニコソアレ」は、「N+ナリ」(の原型の「N+ニアリ」)にコソが介入して出来た形である。本節では「N+ニコソアレ」・「N+ナリ」の両形式の使用状況を通時的に見ていきたい。なお、「体言+ナリ」と「連体+ナリ」では発生時期的にも構文論的にも差があることが先行研究で説かれている¹⁷⁾。よって、これらを区別して検討することにする。

まず、「体言+ナリ」について。このナリはニアリの縮約から出来たとされ、上代においてはナリとニアリが併存する状況である¹⁸⁾。これが中古になると、通常はナリが使用され、ニアリは係助詞・副助詞が挿入された形やニアラズといった形で現れる¹⁹⁾。

次に、「体言+ニコソアレ」の使用状況を通時的に見よう²⁰⁾。これは「体言+ニアリ」にコソが挿入された形であるが、上代ではほとんど見られない。『続日本紀宣命』には無く、『万葉集』では次の1例のみである。

(21) 家島は 名にこそありけれ 海原を 我が恋ひ来つる 妹もあらなくに (『万葉集』3718) ²¹⁾

中古では「体言+ニコソアレ」の形は活発に使用されるようになる。初期資料中にも用例が散見する。

(22) かつ越えて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそありけれ (『古今和歌集』390)

(23) 身を憂しと思ふに消えぬものなればかくてもへぬる世にこそありけれ (『古今和歌集』806)

「連体+ナリ」に移る。定説では、上代において「連体+ナリ」の確例は無いとされており²²⁾、本稿も異存は無い。中古では、よく知られる土佐日記の冒頭の例を初めとして、早くから「連体+ナリ」が活発に使用されている。

(24) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。(『土佐日記』15)

「連体+ニコソアレ」の形は、「体言+ニコソアレ」同様、上代ではごく少数に限られる。『万葉集』には見られず、『続日本紀宣命』に2例あるのみである。

(25) 定不賜奴仁己曾阿礼 (サダメタマハヌニコソアレ) (第31詔)²³⁾

(26) 悟給尔己曾在礼 (サトシタマフニコソアレ) (第44詔)

中古に入っても、初期では適当な用例が見いだせない。

(27) 「うべ、かぐや姫好もしがりたまふにこそありけれ」(『竹取物語』39)

これには「なるほど、かぐや姫が欲しがりなざるもの(※皮衣のこと)である」という訳が当てられる。連体形部分「かぐや姫好もしがりたまふ」は準体句として、実質的なモノ(皮衣)を指しており、「体言+ナリ」に分類するのが適当なところである。

『蜻蛉日記』では数例を数える。

(28) 期もなく思すにこそあなれ。(『蜻蛉日記』239)

(29) 憂き身ひとつをもてわづらふにこそはあめれ、と思ふ思ふ、…(『蜻蛉日記』323)

『源氏物語』になると、「連体+ニコソアレ」は80例ほどで、盛んに使用されていると言える。以上から、中古での「連体+ニコソアレ」の使用状況として、おおむね、「時代が下るにしたがって漸増、11C頃には多数」と言える。

以上、各形式と、その使用状況をまとめると次のようになる。

- ・体言+ナリ…上代、中古通して多
- ・体言+ニコソアレ…上代では稀少、中古では多
- ・連体+ナリ…上代には無、中古では多
- ・連体+ニコソアレ…上代では稀少、中古では漸増

ここから、次の二点が指摘されよう。第一点は、「連体+ナリ/ニコソアレ」は「体言+ナリ/ニコソアレ」より遅れて増加していったということ、第二点として、コソが挿入された「ニコソアレ」は時代が下るとともに好んで使用されるようになったということである。

4. 2 文中でのコソの出現位置の変化

本節では、前節の最後に述べた二点目の傾向(「ニコソアレ」形の増加)について、文中におけるコソの出現位置の変化という観点から捉えてみたい。大野晋(1993: 103-4)で指摘されているように、上代では、コソは主部や条件句に後接する例が多数を占める。

(30) 我が身こそ 関山越えて ここにあらめ 心は妹に 寄りにしものを(『万葉集』3757)

(31) 泊瀬川 流る水沫の 絶えばこそ 我が思ふ心 遂げじと思はめ(『万葉集』1382)

(32) 香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき(『万葉集』13)

(33) 我が名はも 千名の五百名に 立ちぬとも 君が名立たば 惜しみこそ泣け(『万葉集』)

731)

(30) は主部に後接した例。(31) では「未然形+バ」にコソが付いて仮定条件句を成している。(32) の「已然形+コソ」、(33) の「ミ語法+コソ」は共に順接確定条件の例である。

文全体の構造を眺めると、(30) は「主部+コソ+述部」、(31) - (33) は「条件句+コソ+帰結句」となっており、これらにおけるコソはいずれも、文の中間位置、特に文を大きく二分割する位置に割って入ったものと見なすことができる。

そして、上代のコソは、述語の内部に現れることがほとんどない。前述の「体言+ニコソアレ」、「連体+ニコソアレ」の形が若干例あるのみである。つまり、上代ではコソは文の中間に現れるのであり、述語内部のような文末に近い位置に来るのは非常に稀なのである。

しかし中古期になると、述語内部にコソが多く現れるようになる。例えば『源氏物語』で「～ニコソアレ」の形は200例余、コソの用例全体の1割以上に達する。この他にも、次のようにコソが多様な形で述語内部に出現している。

(34) 明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし夜は螢のもえこそわたれ (『古今和歌集』543)

(35) 人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ (『源氏物語』1-315)

(36) 「…世づかぬ御もてなしなれば、ものおそろしくこそあれ」 (『源氏物語』1-115)

(37) 「…なかなかこそ侍らめ」 (『源氏物語』3-413)

(34) の「わたる」は動詞連用形に後接し、「…し続ける」の意を表す。コソが述語「もえわたる」の間に割り込んだ形となっている。(35) は複合動詞内部にコソが現れた例。(36) や (37) は、それぞれ形容詞、形容動詞にコソが介入した例である。これらのような形は上代では見られなかったものである。

このように、上代で文の中間に現れていたコソは、中古には文末の述語位置にも自由に出現するようになったのである。先に、「ニコソアレ」は時代が下るとともに好んで使用されるようになった」と述べた。これは、「係助詞コソの、述語内部への進出」という通時的変化の一端として捉え直すことができる。

4. 3 二の脱落現象

「N+ニコソアレ」形式が中古で定着するようになってから、新たな形が見られるようになる。それはニが抜け落ちた「N+コソアレ」というものである。

この形については、夙に山田孝雄が触れている。山田孝雄(1908: 1114-5)では、本稿で扱ってきた体言や用言連体形に付くナリを「説明動詞」と呼び、「係助詞が附属するときは「に」を省きて「あり」に接することあり」と指摘している。そこで挙げられている例は、

(38) 人の心こそうたてあるものはあれ。(源氏物語)

(39) 何事も生けるかぎりのためこそあれ。(源氏物語)

などである。山田は「うたてあるものにはあれ」、「生けるかぎりのためにこそあれ」の「に」が省かれた、という見方をとるのである。山田孝雄(1913)にもいくつかの例が列挙されている。

「N+コソアレ」の用例の実態はどうであろうか。「N+コソアレ」形は、中古中期の『うつほ物語』、『枕草子』、『源氏物語』から見え始める。『うつほ物語』に10例程度、『枕草子』と『源氏物語』にそれぞれ5例ほど見つかるが、それほど盛んに使われているとは言えない。

「N+コソアレ」の用例には「N+ニコソアレ」という異文が存在することがある。2.2節と同様にして底本の本文とその異文とを提示しよう。

(40) 秋の野のおしなべたるをかしさは、薄こそあれ。(『枕草子』78) —にこそ<能因本>

(41) うきものはわが身こそありけれ、と思ひつづけらるれど、(『源氏物語』2-108) —にこそ<青(肖)・河>

(42) 何ごとも身のためこそはべれ。(『源氏物語』4-139) —にこそは<別(麦阿)>

(43) ことわりこそはありけれ、父などの口開けさせなどしけるは。(『うつほ物語』2-51) —にこそ<イ(長宮)>

(44) 数ならぬ身に、思ふまじきことを思ひ初めたるが、過ちこそあれ、など思ひて参りたり。(『うつほ物語』2-123) —にこそあなれ<菘居九道塙琴イ(長宮富家)>

(45) まことには、恐ろしきものは、弾正の宮こそおはすめれ。(『うつほ物語』2-404) —にこそ<馬>

次は、『うつほ物語』で、前田家本では「N+ニコソアレ」だが他の本では「N+コソアレ」となっているものである。

(46) 繁き嘆きは身にこそありけれ(『うつほ物語』1-460) —こそ<流[榊一兼菘居]>

(47) 「…など人はえのたまひ触れぬにこそあめれ」(『うつほ物語』1-504) —こそ<板長宮榊一二菘岡>

(48) あやしくものの具など、ありがたく清らにするところこそあれ。(『うつほ物語』2-547) —こそ<板>

『うつほ物語』、『枕草子』、『源氏物語』の三資料を見渡しても、諸本の異同はほぼコソアレ—ニコソアレに限られている。これらを見るに、書写意識においては「N+コソアレ」を「N+ニコソアレ」と同等に解していたようである。

「N+コソアレ」は「N+ニコソアレ」を元にして生じた、と推察しても差し支えなからう。しかし、山田孝雄のように「ニの省略」と簡単に片付けるには忍びない。よく知られるように、「N+ニコソアレ」はアレが省略されて「N+ニコソ」の形になる。『源氏

物語』などではこの省略は非常に頻繁に起こっている。一方で、「N+コソアレ」は指摘したようにわずかししか観察されない。このニの消失を、アレ同様の「省略」と捉えるには抵抗を感じるのである。さらに、このようなニの消失は (38) (39) のような「N+係助詞+アリ (の変化形)」という形に限られ、係助詞抜きの「N+アリ」では「N+ニアリ」の解釈とはならない。なぜ係助詞が存在する場合にのみこのような現象が起きるのか。「ニの省略」と言っただけでは済まされないだろう。

ところで、山口堯二 (1990) は中世で「ニヤアラン→ヤラン」という変化が起きたことを論じている。山口氏はこの変化はニの脱落を伴った、と述べる。氏の考えを追うと、

①文中の係助詞は、構文の論理的な流れを断ち切る提示性によって、その直前に位置する格助詞をしばしば脱落させる。

②ニヤアランのニは、ナリの連用形であるものの、語源的に格助詞のニとつながる。

③したがって係助詞ヤの提示性が、ニヤアランのニを脱落させたと考えられる。

という論法になっている。そこでは、ヤのみならずカやコソといった他の係助詞も、ニを脱落させる力を持つことが、中世の用例を以て示唆されている。山口論文で示されたニの脱落の論理は、特定の時代に限定されるものではなく、中古用例にも十分妥当するだろう。係助詞のコソが、格関係を断ち切ってニコソアレのニを脱落させたと考えられるのである。山口堯二 (1990) で扱われたヤランと本稿のコソの文末用法との関わりは、5節で改めて考えてみたい。

4. 4 「N+ニコソアレ」から「N+コソ」へ

4.1節から4.3節までを簡単にまとめよう。中古中期には「体言+ニコソアレ」、「連体+ニコソアレ」ともに、よく使われる形として定着していた。ここには、「上代で文の中間に位置していたコソの、述語位置への進出」という一般的傾向が背後にあった。中古中期は「N+ニコソアレ」という形が見え始めた時期でもある。この形は「N+ニコソアレ」でニが脱落したものと説明された。

さて、「N+ニコソアレ」でアレはしばしば省略され²⁴⁾、「N+ニコソ」となる。この「アレの省略」と「ニの脱落」を併せれば、「N+ニコソアレ→N+ニコソ」という変化が説かれるのである。10C末頃からという「N+ニコソ」の出現時期には、既に上記の文法的背景が備わっていたわけであり、上記説明は、通時的考証にも一致するものである。

このように「N+ニコソ」が

N+ナリ→N+ニコソアレ→N+ニコソ

というルートを経て生じたと考ええると、ナリ (ニアリ) によって文末に存在することを許されたコソが、ニアリ無しでも文末に立つようになった、と見ることができる。これは、係助詞コソの、文末での自立の経過とも受け取れるのである。

5. 中世における係助詞の連体ナリへの介入

前述のとおり、山口堯二（1990）は中世での「ニヤアラン→ヤラン」の変化を考察したものである。氏は、ヤランの成立事情として、連体ナリに係助詞が介入した例が中世に目立ってくる（中古よりも）ことをあげる。本稿4. 1節と合わせると、上代～中古～中世と時代が下るにつれ、係助詞の連体ナリへの介入が増加の一途をたどった、ということになる。山口氏はこの傾向を中世の係り結びの揺らぎ・崩壊と結びつけ、「介入する係助詞の用法が、質的に文末用法に近づく点も、既存の係り結び体系の、論理化に逆らう性格をそれだけ弱めるありようとして、時代の志向に沿えたことであろう。」（66頁）と述べている。

もともと係り結び一特に上代で見られる典型一とは、述語である結び句（連体形や已然形をとる）に対して、係り句（～ヤ・コソなど）が張り合い、文構造に強烈な切れ目、断をもたらしものであった²⁵⁾。しかし、係助詞が述語内部に来るようになると、文構造としての係り句—結び句の対立が弱化、さらには消失してしまう。これは係り結びの乱れの一因としても考えられるものである。

さて、山口堯二（1990）は、中世で、係助詞が質的に文末用法に近くなる現象として、ニヤアラン→ヤランの他にニコソアルナレ→ゴサンナレ、ニコソアルメレ→ゴサンメレもあげている。これらに、本稿で問題としてきた「N+コソ」という用法を加えて、係り結びの典型から外れる、係助詞の文末的用法と括ることができる。

6. おわりに

本稿は、「N+コソ」という文末用法について、それが「N+ニコソアレ」から、ニの脱落とアレの省略を経て成立したということを主張した。この用法は中古・中世で見られる、係助詞の文末述語への介入という一般的傾向の、一つの現れと見ることができた。これは係り結びの乱れを示唆する現象として捉えることも可能であろう。

最後に、本稿の発展としての、今後の研究の見通しを二点述べる。一つ目は「N+コソ」という表現のニュアンスについて、細やかな記述を行いたいということである。これは前後の文脈をふまえて個々の用例を改めて検討したり、係り結びでのコソとの類似点・相違点を考えたりすることで明らかになる。二つ目は、コソの係り結びの重要な用法である、逆接句を形成するというものに関する。コソの逆接用法は上代に多く見られ、中古以降は減少傾向にある。本稿の用法は決して逆接句とはならず、そこで文が途切れるものであるが、管見では（34）-（37）のように述語に介入した係り結びも逆接句とはなりにくいようである。係助詞の述語への進出が逆接用法の減少とどう関わるのか、思索をめぐらせていきたい。

註

- 1) 葛清行 (2006) で、上代で文末に生起するコソの用法があることが指摘されているが、そこで挙げられているのは「理由句+コソ」で終止するものであり、本稿の用法とは構文上の性質が異なる。また、本稿の用法の出自を上代の文末用法に求めることもできない。
- 2) ハが後接した、「～コソハ」の形も含める。
- 3) ここで扱った古典文学テキストの写本には句読点は存在せず、「文をどこで区切るのか」という問題が生ずる。つまり、コソ終止の文を集めるには、①「A こそ。B。」と二文に分かれるのか、それとも、②「A こそ B。」と一文に収まるのかを何らかの方法で見分けねばならない。しかし、②の場合は係り結びによって原則的にBの述語が已然形となり、それが①と②を区別する文法的な判断材料になる。あとは已然形述語が省略されている場合に注意を払えばよい。
- 4) 次節以降の引用もこれらによる。なお、一部用字や送り仮名などを改めたところがある。
- 5) 『新全集』と同じく前田家本を底本とする、『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう)では、「なりにけるにこそ」となっている。
- 6) 校訂で「おろかなるわざにこそ」とされているが、底本では「おろかなるわざこそ」であるので、後者を採る。
- 7) 野口元大 (1976: 273) を参照。
- 8) 幸い、調査した異文の多くは本節のパターン内におさまった。
- 9) 異文の引用は、次による。『源氏物語』…池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社。『枕草子』…根来司編著『新校本枕草子』笠間書院。『うつほ物語』…河野多麻校注『日本古典文学大系』岩波書店 (=『旧大系』)。『源氏物語』、『うつほ物語』の諸本の略号はこれらの本に準ずる。『源氏物語』は、まず青表紙本 (=青)、河内本 (=河)、別本 (=別) のどの系統に属するかを示し、それに続いて括弧内に写本の名称を記した。『うつほ物語』で、『新全集』と『旧大系』に異同があり、しかも『旧大系』で異文が載せられていない場合、『旧大系』の底本で異文を代表させて<板>とした。
- 10) 以下、作品名の後の数字は頁数。ただし和歌の場合は歌番号。
- 11) おうふう版では、「聞こえざりつるこそ」となっている。
- 12) 『新大系』は「馬副童 (馬の口とりをする少年) といったところね。」と、『旧大系』は「馬の附添の程度ですわ。」と解している。
- 13) 『新大系』は「ましていましめおきたるこそ」を、「まして厳しく注意してあつたに違いない。」(下線部は本稿の筆者による) と訳している。
- 14) 北原保雄 (1966)、高山善行 (1990) など。
- 15) 山田孝雄 (1908: 658) では、「こ (引用者注: 「こそ」のこと) は一方にては「ぞ」に対して一方に於いては「なむ」に対して論理的に又感情的に最高度の調子を有するものなり。」と述べられている。

- 16) 2. 2節、 γ の異文もこれを裏付ける。
- 17) たとえば、松尾捨治郎（1961）、北原保雄（1981）など。
- 18) 上代におけるナリとニアリの分布、また、ナリの成立過程については、釘貫亨（1999a）、同（1999b）が詳しい。
- 19) 中村幸弘（1995）の第一編、第二章参照。
- 20) 「ニコソアラメ」、「ニコソアメレ」のように、助動詞が付属した形式も含める。
- 21) 『万葉集』の引用は塙書房のCD-ROM版による。
- 22) 松尾捨治郎（1961）の第4章、第1節で精査されている。
- 23) 引用は『続日本紀宣命 校本・総索引』（吉川弘文館）による。
- 24) これは10C半ば頃までは少なく、『うつほ物語』、『源氏物語』に多く見られる。
- 25) 尾上圭介（2002）参照。

参考文献

- 江口正弘（1963）「「こそあれ」考 —文型と意味—」『国語学』55.
- 大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店.
- 尾上圭介（2002）「係助詞の二種」『国語と国文学』79-8.
- 北原保雄（1966）「〈終止なり〉と〈連体なり〉—その分布と構造的意味—」『国語と国文学』43-9.
- 北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店.
- 釘貫亨（1999a）「完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立」『万葉』170.
- 釘貫亨（1999b）「断定辞ナリの成立に関する補論—万葉集と宣命を資料として—」『日本語論究』6.
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究 助詞史の素描』桜楓社.
- 此島正年（1979）『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社.
- 佐伯梅友（1956）「「にあり」から「である」へ」『国語学』26.
- 高山善行（1990）「連体ナリと終止ナリの差異について」『国語学』163.
- 蔦清行（2006）「終止のコソ」『国語国文』75-5.
- 中村幸弘（1995）『補助用言に関する研究』右文書院.
- 中村幸弘（2004）「題述文「…は…こそあれ」と、その変移・漸移の諸相（上）・（下）」『国学院雑誌』105-7・12.
- 野口元大（1976）『うつほ物語の研究』笠間書院.
- 野村剛史（2004）「述語の形態と意味」, 北原保雄 監修・尾上圭介 編『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店, 第3章.
- 野村剛史（2005）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82-11.
- 松尾捨治郎（1961）『助動詞の研究』白帝社.
- 森重敏（1977）『日本文法通論』風間書房.
- 森野崇（2003）「特立のとりたての歴史的变化—中世以前—」, 沼田善子・野田尚史編『日本語の

とりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版.

山口堯二 (1990) 「疑問助詞「やらん」の成立」『語文 (大阪大学)』53・54.

山口堯二 (2005) 「「にあり」式連語係助詞介入小史」『国語と国文学』82-11.

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館.

山田孝雄 (1913) 『奈良朝文法史』宝文館.

山田孝雄 (1913) 『平安朝文法史』宝文館.